



| | |
|--------------|---|
| Title | セメイ・L・カクングル : そのガンダ王国時代 |
| Author(s) | 長島, 信弘 |
| Citation | 一橋論叢, 73(4): 354-373 |
| Issue Date | 1975-04-01 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Text Version | publisher |
| URL | http://doi.org/10.15057/1807 |
| Right | |

セメイ・L・カクングル

—そのガンダ王国時代—

「半世紀遅く生れたのが彼の
悲劇だった」H・B・トマス

一 はじめに

「晩年の光景は限りなく哀しいものだった。人生の黄昏の日々を迎えて、この老いた戦士はよく机に向かって元帳を開いていた。そこにはイギリス政府との数々の取引が記されていて、彼の計算によると貸しは百万ポンドを超えていた。生涯をかけて成し遂げた事蹟を、賤しい貨幣価値でしか評価しようのない新しい時世の卑俗さに、感じやすい貴族の傲慢な精神はおそらく嫌悪の念にまみれていたに違いない。」(Thomas, H. B. 1939: 136)

「生れるのが半世紀早ければ、そしてカクングルの得た好機がイギリスのウガンダ占領によって生じたという

長 島 信 弘

事実をたな上げにすれば、四十年前イギリス政府は、サミアからブニョロにかけてひろがる、多数の原住民を農奴として支配する少数のガンダ人移民のよく組織された王国を見出したことであろう。」(同上)

自分の成した貢献を時価に換算すれば百万ポンドを超える筈だと豪語しながら、あらゆる白人を呪いつつ死んでいったセメイ・ルワキレンジ・カクングルについて書こうとすれば、下手な講談かせいぜい安手の英雄武勲誌になりかねないという危惧に駆られる。それほど彼の一生は波瀾に富み、とりわけ前半生は栄光と賞讃に満ちていたのである。

カクングルがウガンダの半農半牧民テソ人の社会の近

代化に与えた影響については簡単に記したことがある(長島、一九七二、一〇四—一〇八)が、そこで犯した誤りを正しながら、カクングルという個人の一生を跡づけて、彼の置かれた諸状況、彼を動かした諸要因を素描することによって民族誌と歴史の接点を求めようというのが最初の心積りであった。しかしそのためには、従来十分手がけていなかった湖間バントウ諸王国⁽¹⁾のことばかりでなく、当時の東アフリカひいては国際情勢一般についての広汎な知識が必要であり、また入手不能や目を通していない資料も多く、紙数の制限も加わって、本来一番書きたかった一九〇〇年以後のことを割愛せざるを得なくなり、それ以前のことと結局カクングルの多彩な軌跡を追うのに精一杯ということになりそうである。

二 ガンダ王国

ガンダ王国⁽²⁾の南西にコキという小さな王国があった。カクングルが、おそらく一八六〇年代に、このコキで生れたことは確かだが、後に本人が主張したように王族の出だったのか(Roscoe, J. 1932: 204)、あるいは奴隷の身分だったのか(Thomas: 125)定かでないところがい

かにも英雄らしい。長身で、彫りの深いすぐに目立つ秀でた容貌のもちぬしだったことはよく知られている。

彼がガンダ王国に來たのはムテサ一世の治世(一八五二—一八四)の末の頃だったようである。ガンダ王国の盛衰だけでも一冊の書物になるのでここでは簡単に記す。かつてブニョロキタラという大帝國が現在のウガンダの南西部からタンザニア北西部にかけて栄えていた。ガンダ國はそれから分れた、ヴィクトリア湖北岸の小國に過ぎなかったが、十七世紀に入ってニョロ王國の衰退に伴って伸張し、中央集權化を推進していった。十八世紀には象牙その他の交易を外部世界と行っており、次第に南方の小國を併合して強大化していった。その軍事力はアラブ商人から手に入れた鉄砲に依る所が大きかった。一八六二年にヨーロッパ人として初めてこの國を訪れた探險家スピークとグラントを迎えたムテサ王は、臣下に対して生殺与奪の權をもつ強力な君主だった。他の隣接諸王國とくらべてもガンダ王(カバカとよばれる)の王權は強大で、國家組織もいくつかの違った特性を示していた。他の諸國では牧畜民と農耕民の間に階層分化が著しかったのに較べて、ガンダはほぼ同質的な農耕社会で、

バナナ栽培を中心とし生産力とその安定性において他をしのでいた。また氏族制を基盤としながらも、官職においては極力世襲制を排し、王の任命による流動的な官僚制度を発達させていた。その頂点はカティキロ(宰相)とよばれる平民の代表だった。そもそも王族というものがあるがガンダ国には存在しなかった。一般民は父系出自を辿るものの、王子たちは母の氏族に属したからである。これは王の氏族が他の氏族より強大化することを妨げ、「王族はなく、唯王朝だけが存在」すべきだという政治理念に基づいたものであった。また常備軍をもっていたことも他の王国と異っていた。(Richards, I. 1959: 45—47. Beattie, J. 1971. 247)

三 出世とその背景

カクングルはこのガンダ国で象狩りの名手として名を挙げ、即位して間もない青年王ムワンガ(一八八四年十八歳で即位)と接触するようになった。ニョロ王国との戦いに必要な鉄砲を手に入れるための重要な交易品が象牙だったからである。プロテスタント(イギリス国教会)として入信してアポロ・カグワの聖書クラスに入っ

たのもおそらくこの頃であろう。後にガンダ王国の宰相として近代化に凄腕をふるったカグワとの出会いは、彼の一生を決定づけるような大きな意味をもっていた。

ヘンリー・スタンリーのよびかけに応じて最初にガンダ国を訪れたのはC M S (Church Missionary Society イギリス国教会の組織)の宣教師たちだった。カトリックはフランス系のホワイト神父派が一八七九年から伝道をはじめている。ムテサ王の宮廷にはアラブ商人たちと、その影響でイスラム教徒になったガンダ人がいて、キリスト教の普及に反対したが、王は宗教よりも宣教師の果たす文明に早くから着目してその活動を許していた。(Low, D. A. 1963: 346—7)

ムワンガが即位した頃、宮廷にはすでに多くのキリスト教徒があり、ワ・イングレザ(プロテスタント)とワ・フランサ(カトリック)の対立が激しくなっていた。伝統的権威をあまり尊重せぬキリスト教徒に対してムワンガは好意を見せず、宣教師たちには露骨に嫌悪の情を示したという。イスラム教徒の背後からの働きかけもあったろうが、気まぐれで情緒不安定という評判の青年王は、一八八五年、首都メンゴに向かう途中のビショップ・ハ

ニングトンを途中で殺させ、些細な事件をとりあげてキリスト教徒三十人を焙殺するという荒っぽい行動をとった。⁽³⁾この結果宮廷での実権はイスラム教徒に移った。

王とはいえど思うように権勢をふるえず苛立っていたムワンガは、一八八八年イスラム教徒とキリスト教二派をまとめて追放しようと企てて失敗し、廃位の憂目にあつた。当時キリスト教徒はそれぞれ千名近い兵士を擁して反目し合い協力態勢にはほど遠かつた。ムワンガの長兄キウエワが王に推されると、イスラム派との三者対立は更に激化したが、一ヶ月後イスラム教徒はクーデターに成功し、キリスト教徒を首都から追放した。キウエワ王も割礼を拒否したという理由で王位を追われ、代つて弟のカレマが即位した。

ムワンガは最初アラブ商人の助力でヴィクトリア湖南岸へ落ちのびたが、ここでフランス人宣教師の世話になり、後にイギリス人商人の助けを得て湖を北上しブルングギ島に到った。つまりイスラム、カトリック、さらにプロテスタントの三者を網渡りの的に利用したともいえる。

カグワはプロテスタント派を率いてアンコレ王国に身

を寄せていたが、ムワンガ帰るの報を聞いてブルングギ島に馳せつけた。カクングルも同行していたようである。カトリック派もこれに合流して、ここにキリスト教徒の連合軍が形成された。(Hemphill, M. de Kieviet 1963: 400—402)

ムワンガにとって事は宗教戦争というよりは自分の復権にあつたろうし、キリスト教徒たちがムワンガをかついだのも「旧王」に対する忠誠よりは、大義名分を必要としたからであろう。一八八九年十月、攻撃の火蓋が切られ、キリスト教徒は激しい戦いの後に首都を奪回した。一たん敗走したイスラム教徒はニヨロ王カバレガの援助をうけて反抗にうつり、ムワンガ軍は再び守勢に立たされたが一八九〇年二月の戦いで勝利をおさめ、ムワンガは王に復位した。(Hemphill, 402)

王はカグワをカティキロ(宰相)に任命すると共に、この戦役で終始プロテスタント軍を陣頭指揮して大活躍をしたカクングルにナイル川西岸の一地域を領土として与え、その地方の首長に任じた。かくして、一介の流れ者に過ぎなかったカクングルがガンダ王国の中央に登場することになったのである。(Thomas: 126)

四 イギリスの進出とニヨロ王国

政權回復後すぐにプロテスタントとカトリックの対立は旧にもまして激化していった。官職の不平等もさることながら対立の争点は土地の配分と、一方から他方に改宗した者の土地の処分についてであった。この頃ドイツとイギリスの双方がガンダ王国と協定を結ぼうと接触しており、ムワンガ王はカトリックに傾き、親独反英の気配をみせていた。

一八九〇年七月に締結された英独協定によって両者の優劣関係はくつがえされた。イギリス東アフリカ会社の代表フレデリック・ルガードの来訪をはらわたの煮えくり返るような想いで迎えたのは王とカトリック派だった。ルガードは十二月、王および首長たちとの間に東アフリカ会社に宗主権を認めさせる協定を結び、最初の行政官となった。

北方のニヨロ王国をとりまく情勢についても一言しておかねばならない。エジプト領スーダンの総督として派遣されたゴードン將軍はナイル上流の開発を目指し、ニヨロ王やガンダ王にも使節を送ったりしていたが、現在

のウガンダ北部まで守備隊を送りその勢力圏としていた。しかしマーデイの乱で一八八五年ゴードン將軍がハルトゥームで戦死すると、上流のエジプト・スーダン軍は孤立し、次第にその統制力を失っていった。エクタトリア州の総督だったエミン・パシャ〔本名エドアルト・シュニツァというドイツ人〕もまたアルバート湖北方のワデライに孤立した。

エジプト勢力の衰退に乗じてニヨロ王カバレガはしばしば北方へ進出したが、ガンダ軍の南からの攻勢に悩まされて専念できる状態ではなかった。ニヨロ国はその軍事力の多くをアラブ人などの傭兵に依っており、スーダンおよび南のドイツ領からアンコレの西を通って入ってくる鉄砲がその戦力を支えていた。後にこの南ルートがイギリス軍の軍事目標になる。

ヘンリー・スタンリーのエミン・パシャ救出隊がコンゴの森林を抜けてアルバート湖からパシャに合流したのは一八八七年末のことだが、一行はカバレガ王と対立したため動きがとれなくなる。スタンリーがパシャを説得して婦女子を含む千五百人を率いてアルバート湖南岸から東海岸への脱出を敢行したのは一八八九年になってか

らだった。このときバシヤが後に残したスーダン兵が後のウガンダの戦乱の一つの目となるのである。(Hemp-hill, 403—407)

カバレガ王ひいてはニヨロ国そのものが、サミュエル・ベイカーの不幸な初訪以来ヨーロッパでは大要評判が悪かった。好戦的で陰険で信頼し難いというイメージが、貴族的で進歩的なガンダ国との対比で一層強化されていった。ニヨロ側の資料では、カバレガ王も何度かイギリスに和平の申し入れをしたのだが、ガンダ人が握りつぶしたり、イギリス側の不信感のためなどの結果、一八九〇年にはニヨロ国は武力平定しかありえない存在とイギリス側にきめつけられていた。(Beattie: 62—72)

五 フタバング賊の乱と新旧教徒の争い

一八九一年七月、ルガードはアンコレからトロに入り、ニヨロ軍の攻勢を防ぐための砦を各地に作り始めた。このとき彼の戦力となったのはバシヤに取り残されたスーダン兵たちだった。

このルガードの留守中、ガンダ国内ではカクングル自身がまきこまれる事件が起った。発端は一人の転宗者の

土地をめぐるカトリックとプロテスタントの訴訟問題だったが、たまたまその係争地がカクングルの領地キヤグウェに近かった。その頃フタバングとよばれる、大麻吸飲を常習とする盗賊団がキヤグウェ地方に向かったという報が入り、カクングルはカンバラ守備隊長ウィリアムズ大尉の許可を得て領地の防衛に向かった。これを見たカトリック派は彼が係争地を武力で占拠しようとしていると考え、直ちに追撃隊を送った。カクングルはこのカトリック軍を直ちに打ち破り(十三人のカトリック兵が死んだ)、一応事態を收拾した。

しかし一八九二年、フタバング賊は再びキヤグウェ地方を襲った。この頃すでに「ウガンダでもっとも名高い武将」と評判をとっていたカクングルはプロテスタントの一軍を率いて鎮圧に向かい、後を追うようにセボワの率いるカトリック軍が発した。カクングルはカトリック軍の着く前にフタバング賊を鎮圧した。(Thomas: 182)

両派の指揮官が首都を離れていたこの期間にメンゴで遂にカトリックとプロテスタントの武力衝突が起った。モンバサへの帰還命令を受けたルガードの少々横暴な振

舞いが原因だった。王の宮廷での裁判で正当防衛ということでは無罪になったカトリック派の男を有罪にしろと強硬にねじこんだのである。ガンダ国を離れる前に東アフリカ会社の権威を確立しようとしたのかもしれない。

事は東アフリカ会社対ムワンガ王とカトリック派の威信をかけた対決に発展した。一八九三年一月二十四日、ルガードはカンバラ砦の全火器（マキシム機関銃一丁に約五百丁の小銃）をプロテスタントに配った。どちらが先に仕掛けたかはわからないが機関銃の威力は絶大で王とカトリック派は敗れ、ブルンギ島に逃げ去った。

この報を聞いてカクングルはすぐメンゴに帰還したが、自派の敗報を聞いたセボワは兵の他に一般カトリック信者を連れてカンバラ北部を迂回し、ブドゥ地方へ退却を開始した。時を同じくしてブドゥ地方にいた三人のプロテスタント宣教師が難を避けるために数千の民衆と共にカンバラへ向かったがその道筋は南下するカトリック軍と同じものであり、惨劇は目前に迫っていた。このとき少数の兵を率いてメンゴから急行し、カトリック軍の方向を変えさせて危機を救ったのがカクングルだった。（Thomas: 126—7）この三人の宣教師の生命を後にカク

ングルがどの程度の貨幣価値に換算したかは知るよしもない。

六 キンブグウェへの昇進

一八九二年二月、カクングルはウィリアムズ大尉に従ってセセ諸島に赴き、カトリック教徒の島を占領している。

同年三月、ルガードは戦後の混乱を收拾するため、王の不在にもかかわらずカトリック派の首長たちの占めていた役職をプロテスタントのリーダーたちに与えた。ガンダ王国としてはこれは大変な内政干渉であり、ムワング王が怒ったのも無理はない。

いずれにしてもこのお手盛り人事で功績抜群のカクングルは「キンブグウェ」の地位を与えられた。この職は伝統的にはカテキロに次ぐ重要なもので、王の臍の緒を奉納する神殿を管理する神官職である。王の臍の緒は「双生児」とよばれるが、これは王たる者は必ず双生児であり、その兄弟は目に見えない霊であるという観念に基づいていた。臍の緒はその霊の依代である。キンブグウェの住居と神殿は王宮に隣接し、毎月行われる新月の

儀礼のとき、臍の緒を包んだものを王に渡し、王はそれを開いて調べてからキンブグウェに返す。キンブグウェはこれを神殿にもち帰り、その前で包みを再び開いて新月の最初の微光が臍の緒にあたるようにした。キンブグウェに任命されるのは王の寵臣であり、自由に王を訪れることができ、また王の評議會で王に助言をすることができた。(Roscoe, J. 1911: 235—6) この新月の儀礼はガンダ王国の宮廷儀礼の中心であり、先王の墓所で行われた。(Richards: 44)

カクングルが実際にこのような役割を果たしたかどうか記録にないが(おそらくその機会は乏しかったであろう)、彼が最後の「真のキンブグウェ」とよばれていたことも事実である。「双生児」の観念はガンダ国にとどまらず、東アフリカの諸文化において大きな宇宙論的意味をもっているが、ここでは触れる余裕がない。ただ人類学者の「通弊」として私もまたこの種の観念をきちんと理解することは、政治、経済状況を分析することと同等以上の重要性をもっていると考えていることを付言しておく。

少々可笑しいことに、数週間後もう一人のキンブグウ

エが誕生、というより正確には復活、することになる。というのは、ルガードが政党としてのカトリック派を認め、ブドゥ地方を与えるという条件でカトリック派との和平交渉を成立させたからである。この結果それまでキンブグウェの地位にあったムグワニャに再びその地位が与えられた。その代りにルガードはムワンガ王とカトリック派の領袖たちに東アフリカ会社の宗主権を確認させ、社旗を掲揚させた。また、これもまた少々可笑しいことに、ムワンガ王はこのときプロテスタントへ転向することを表明している。イスラム教徒はブドゥとカンバラの間の小さな三つの地方を与えられ、キリスト教両派の緩衝地帯の役割を与えられた。これらの協定によって、イギリスは初めてウガンダにその勢力の基盤を確立したといえる。(Hemphill: 422—3) とすれば、ルガードの一見粗暴に見えた一連の行動は計算づくの挑発行為だったと結果的には見直すこともできよう。

そのルガードのカクングルに対する評価は最大級のものだった。「ウガンダで私が完全に信頼していた人物」を三人あげているが、カクングルとセボワがその中に入っており、カグワの名はない。(Thomas: 127) もっと

もこの信頼されるところがカクングルの弱味であったともいえる。作戦家として、指揮官として、また組織者として、カクングルの才能は誰もが認めるものだったが、彼の辿った運命を結果論的にいえば、要するに政治家ではなかったのである。正直すぎたともいえる。カクングルにはどうも「義経」的などころがある。その点カグワは、ルガードよりはスケールの大きい大狸だったように見える。カグワもまた憤怒に近い心境で死を迎えるのだが、傷ついたプライドという点では両者に共通するものがあるとはいえ、どうも死に様が違うように読める。すくなくともカグワはカクングルのように一途に「裏切られた」という恨みに燃えてはいなかったようである。

七 イスラム教徒の反乱

一八九二年の四月から五月にかけて、カクングルはウイリアムズ大尉と共にソガ地方に赴き、伝統的な首長たちの地位の保全につとめている。やがてソガ沖のブヅマ島民がガンダからの航路で頻々と略奪を始めた。一八九三年一月、ウイリアムズ大尉は航路の安全を維持するためにムワンガ王の協力を要請し、カクングルは総司令官

に任命され、ガンダ国の全戦闘カヌーを率いて出撃した。二千の銃兵と三千の槍兵をのせたガンダ水軍の大船団はブヅマ島民の戦意をくじくのに十分すぎるものだった。(Thomas: 127)

この年の四月、イギリス政府に派遣されたジェラルド・ポーターはムワンガ王との間に新しい保護条約を結び、東アフリカ会社の旗に代ってユニオン・ジャックが掲揚された。一八九二年の土地配分を改訂してカトリック派により多くの土地を与え、またすべての官職をプロテスタントとカトリック両派が同時に保有する二重制度を設けた。この結果カトリック派のキンブグウェだったムグワニヤにカグワと同じカティキロの地位が与えられた。これはカクングルにとって二人の上司ができたことを意味し、実質上ナンバー3に下ったことになる。

(Hemphill: 424)

この改革はイスラム教徒にとって大いに不満なものだった。彼らはルガードがニョロから連れてきたスーダン兵と呼応してクーデターを企てていた。六月に司令官マクドナルド大尉はスーダン兵の武装を解除させるとともにカグワに動員を命じた。(同上、425) カクングル指揮

のプロテスタント軍は直ちに首都近くのイスラム教徒の本拠を急襲し、敗走する反乱軍をシンゴ地方へ追い払った。反乱軍はこのときトロ王国でオーウエン少佐の指揮下にあったスーダン兵(イスラム教徒)の呼応を当にしてお西に向かった。

オーウエンは危機に陥入った。しかしオーウエンが反乱軍との交渉で時を稼いでいる間に七千のガンダ兵を率いたカクングルが到着し、反乱軍に潰滅的打撃を与えて四散させた。(Thomas, 128)

八 ニヨロ戦役と占領地の分割

ニヨロ王カバレガは当時しきりにトロ王国(かつてはニヨロ国の分国)に侵入し、遂にカサガマ王を山地に追いやり、キヨガ湖方面からの南下と併せた両面作戦でガンダ王国を脅かしていた。一八九三年十一月、着任したばかりの弁務官コルヴァイル大佐は、コンゴから進出したつあつたベルギー勢力への牽制も兼ねて、ニヨロ国に對して武力を行使する決定を下した。ムワンガ王はカクングルをガンダ軍の司令官に任じ、一万五千の兵を与えた。

コルヴァイル大佐とマクドナルド大尉の率いるスーダン兵ガンダ軍との連合軍は大晦日カフ川を渡り、ニヨロ国の首都ホイマを目指した。カクングルは古式に従って兵士たちの肩にかつがれ、その上から指揮をとったという。各地で激戦となったが、ニヨロ軍は次第に押されてブドンゴの森(チンパンジの棲息地として知られている)に逃げこんだ。ここでもカクングルは秀れた指揮官としての手腕を遺憾なく發揮したらしい。後にコルヴァイルは次のように書いている。

「ガンダの將軍カクングルに対して私は特別に感謝の意を表わさなければならぬ。彼は私のあらゆる命令をたちどころに実行し、部下たちを巧みに動かし、一万五千の兵をカドゥマに同時集結させるといふ難事を果たし、ブドンゴの森では鮮やかな奇襲作戦でカバレガ軍を打ち破ったのである。」(Thomas: 128) これではコルヴァイル自身は何をしたのかわからないほどである。

カバレガはブドンゴの森こそ脱出したもののその後の反攻にも失敗し、ナイル川を渡って東方のランゴ族の地へ逃れた。この敗戦はニヨロ国にとってその後何十年も続く苦難の始まりとなった。国土は戦いと略奪、疫病の

ために疲弊し、その上南部と西部の広大な領土を失ったのである。(Beattie: 74—77)

一八九四年四月、ムワンガ王の官廷でカフ川以南のニヨロ王国の旧領土の分割が行われ、カトリック派は西部、プロテスタント派は中部を与えられた。カクングルは特にヴィクトリアナイルとセジブワ川には含まれたブゲレレの地を与えられた。英軍からはウニヨロ勲章を貰っている。

九 ブゲレレの平定

ブゲレレの新領地への出発に際して、王はカクングルにキャグウェ・キレタという名の王家の聖鼓の一つを与えた。太鼓はこの国では楽器以上のもので、王や首長の地位の象徴であり、また祖先の霊の依代でもある。(Roscoe, 1911: 25—30)

カクングルの部下の一人にシモニ・ワスワという青年がいた。彼は後に将校の一人として大いに活躍すると共に植民地政府の代理人として地方行政に貢献しているが、一九五〇年にカクングルと共に戦った日々⁽⁵⁾のことを手記にまとめている。「バガンダのムテサとムワンガ王の治

世は多くの戦争が行われた大へん危険な時代だった」というのがその書き出しだが、自分が一八七七年生れであると記した後の最初の記述がこのブゲレレへ初めて赴いたときのことである。この手記の雰囲気⁽⁶⁾を伝えるためにも少々長く引用しておく。

「一八九四年、S・L・カクングル・キンブグウェは王ダニエリ・ムワンガにブゲレレのブニャラへ行くことを命じられた。その地で支配者ナムヨンジョと出会い戦いが起ったがカクングルは住民を破った。そしてここに砦をたてた。……(十行略)

ミスター・カクングルの部下は王に与えられた太鼓キヤグワ・キレタを求めた。彼はそれを部下に与え、手元にはクングラという名の太鼓を置いた。それから若者たちは夜の間に出発し、セジブワ川を渡り、バンドダ氏とナゴマ氏の住居に着いた。道々彼らは戦士の歌を歌い続けたが、カバガンケの所に着いたとき住民たちが戦う用意をしているのを知った。戦いが起り、カバガンケの人は敗北し、反対側(味方のこと)はたった一人の負傷者を出しただけだった。午後三時だった。

ミスター・カクングルはこのことを聞くと、その隊の

隊長イサカ・ンジガを救援するために百名の兵士を派遣した。幸いなことに、この救援隊は味方がすでにバンダに着いていることを知った。二人の捕虜を伴っていた。彼らはカバガンケの所で起ったことをすべて語った。我がミスター・カクングルの所に戻ると、彼は五頭の牛をくれた。」

この手記でもカクングル軍の情報伝達が正確で、かつ早々と援軍をくり出すことが知られるが、一連の記録を見るとカクングルの成功の基盤となった戦術は分隊による狭撃、本隊の迅速な救援、それらを支えるコミュニケーションの良さであったようである。つまりスピードとタイミングの良さが武器で、待ち伏せはあまりやらなかったらしい。

ブゲレレの住民はほとんどがニョロ人で、最初はいろいろと抵抗もあったようだが、カクングルは次第に地元的首長たちを手なづけていき、「貴族的ではあるがあまり弾圧的ではない支配者」という評判を得たという。(Thomas: 129) 彼にとってこれが非ガンダ人を統治する最初の経験だったが、後にこれが大いに生きてくることになる。

十 ウガンダ保護領の成立と王国の改革

一八九四年六月、イギリス政府はウガンダを保護領とすることを宣言した。といってもわずか二十人足らずの軍人行政官が各地に散在しただけの貧弱な政体で予算も乏しかった。

カクングルはこの年の十月、ムワンガの妹ナカレマと結婚式を挙げた。国中の名士の参加した盛大なもので、このときがガンダ国内におけるカクングルの絶頂期だった。世の中は急速に変わりつつあった。一八九五年早々に着任した弁務官ジョージ・ウィルソンは次々と根本的改革に着手していった。まず第一に議会制ともいべきルキコ制度の確立である。これは伝統的には宮廷で王を中心に行われていた長老会議を基にしたもので、立法・司法・行政を一体化した会議であった。このルキコ制度はその後ウガンダ全地域の地方政体のモデルとなった。これに伴ってウィルソンは権限の錯綜していた伝統的官職を体系的なヒエラルキーに改訂し、同時に行政単位をサザ(カウンティ)、ゴンボロラ(サブリカウンティ)、ムルカ(バリッシュ)という直列型にして区画をはっきり

させた。これらの改革の結果カティキロの権限は増大し、王権は著しく削減されるにいたった。キンブグウェの地位も後にこの新体系から外されることになる。

(Low, D. A. 1965: 61—66)

ウィルソンの原則は土着の政体を近代化しつつ存続させ、その上に植民地行政を置こうとするもので、北ナイジェリアで成功して「間接統治」として知られるようになったイギリスの植民地政策と一致するものだが、ガンダの場合ナイジェリアとは独自になされたものである。

この改革を内部から支えたのが、アポロ・カグワで、彼は王国を激変する情勢に対応できるよう絶えず近代化に意をそそぎ、ガンダ王国と自身の地位を安定させるために忍耐強くイギリス側と交渉しつづけたのである。

(Low, 1965: 65—67. Apter, D. 1961: 149—150)

十一 カグワとカクングルの対立

一八九五年、ニヨロ王カバレガは再び勢力を盛り返し、キヨガ湖北方からしばしばガンダ領を襲っていた。三月にはダニング大尉が戦死した。司令官カニンガム少佐はこれに対する大規模な報復作戦を企てた。スーダン兵六

箇中隊、機関銃五台、ガンダ兵二万の総勢力がホイマ、カンバラ、ブソガの三方向からムルリ対岸を目指して進んだ。カクングルはソガ方面のウィリアム・グラントの指揮下に入り、百三十三隻のカヌーに四百人の部下を分乗させてキヨガ湖を渡った。「集結のタイミングは完璧だった。続々と押しよせていくカヌーの大群の光景はもっとも印象的なスペクタクルでアフリカで二度と見られぬほどのものであった。」(Thomas: 129)

カクングルは先頭に立ってカバレガ陣に迫り、槍傷を受けたものの屈せず、敗走する敵を追ってグルまで進み、さらにニヨロ軍を打ち破ったがカバレガはまたも逃れ去った。カクングルは四十人の部下を失った。(Waswa)

この年、カクングルにとっても東部ウガンダにとっても後に大きな意味をもってくるささやかな事があった。

キヨガ湖東岸からクマム族が八十人ほどカクングルを訪れたのである。カクングルは副官をつけて彼らを首都メ

ンゴに送り、王はこの来客を大いに歓待した。(Waswa) 同年八月、カクングルはワミア(ケニア西部)遠征に九百人の部下を連れて参加している。これはナイロビからの旅行者を襲う原住民鎮圧のため、このときはカク

ングル夫人をはじめ多くの女性が従軍したというから軽い気持もあったのだろう。ワスワも住民の武器は弓矢だけだったと書いている。

かねて両雄並び立たずと噂されていたカグワとカクングルが訴訟事件という形で明らさまに対決したのもこの年だった。トマスによれば、四月のカベレガとの戦いで得た牛の分配が原因で、カクングルは敗訴して、すぐにキンブグウエの職を辞したとあり (Thomas: 129—130) ローランスもこれに従っているが (Lawrance, J. C. D. 1955: 21)、ワスワの手記では、カグワが告訴したのはケニア遠征の後のことで、その原因も違うことになっている。以下はワスワの記述による。

カクングルは王の許可を得てブゲレレに帰り、部下を連れてカベラマイドに渡った。このときカグワの部下の一部が彼に無断で参加した。一行はランゴ族と戦って多数の死傷者を出した。このことでカグワはカクングルを二つの罪状で告訴した。第一はカグワの部下を無断で傘下に加え、死傷者を出したことである。この件はカグワの部下の証言でカクングルの勝訴になった。第二は王に無断で遠征を行ったことで、カクングルは自ら有罪を認

め、重い科料を払ったとある。この訴訟は一八九六年にかかったともあるので (Waswa)、カクングルの辞職も九六年のことになる。どうもワスワの方が正確のようにある。

辞職は強制されたものではなく自発的だったと推測できる。束縛されるのが嫌いで辺境志向をもったカクングルの性質から出た行動であろう。この性質は後に植民地行政としばしば衝突し、その才能は利用されながらも次第に体制から外されていく晩年の悲劇の原因の一つでもあったろう。まあそれは一九〇二年以後のことではあるが。

十二 キヨガ湖の彼岸

イギリス勢力にとって中央から引退したカクングルの価値は減るものではなかった。九六年には早くもシトウエル大尉がブゲレレに彼を訪れ、キヨガ湖対岸に住む「バケデイ」(裸族)の融和政策について相談している。バケデイというのは単一の部族ではなく、ナイル川とキヨガ湖東方に拡がるサバンナに住むアチヨリ、ランゴ、クマム、テソなどの牧畜民の総称(蔑称)である。彼ら

の社会は王制や首长制をもたぬ非集中型⁽⁶⁾の政治体系から成り、イギリス人には交渉相手のわかりにくい苦手なタ
イプの社会だった。

カクングルは早くから対岸に新天地を考えていたよう
でこの年カウエリ島に砦を作って守備隊を置き、ブゲレ
レの北端でもガリラヤ砦建設に着手している。(一九〇
〇年にはブゲレレの地を王に返して「カクングル帝国」
建設のために本格的な東方征服にのり出すことになる)。
この年にもクマムとテソのリーダー達が百人ほどカク
グルを訪れ、彼は王に会わせている。

十三 ガンダ国の大乱

カクングルの東方進出を引きとめたのは、保護領の存
続自体を危くするような相次ぐ反乱の勃発だった。イギ
リス人行政官と彼らに協力を惜しまぬガンダ人官僚のた
めに伝統的権利を奪われ儀礼的地位に甘んじていた、い
ささか武田勝頼の性格のムワンガ王にとって、屈辱の限
界を超える事件が起った。一八九七年イギリス側は象牙
の不法輸出ということで王を公けに批難し、カグワらが
これを支持したのである。象牙の交易権は王権の象徴と

もいうべきものだった。キリスト教徒の間にも不満があ
った。一夫多妻や飲酒を教会が厳しく禁じたからである。
同年七月王はカトリック派の武将ガブリエル・キン
トウと共に首都を脱出し、ブドゥ地方で反乱を起した。し
かし二人のカテキロの確固たる統制力で他の地方の住
民はこれに呼応せず、イスラム教徒もイギリス側に廻
った。その結果自分たちの王を追討する軍に多くのガン
ダ人が参集した。カクングルもまた一隊を派遣している。

王はブドゥでの戦いに敗れてドイツ領(タンガニイカ)
に逃げ、キントウも奥地に身を隠した。この結果ムワン
ガは王位を剝奪され、王子ダウディ・チュワ(八歳)が
即位し、カグワを筆頭とする三人の摂政が任命された。

イギリスにとってガンダ軍は友軍であつても直屬では
なく、その戦力はスーダン兵によつていた。相次ぐ転戦
と安くその上遅れがちな給料のためにスーダン兵の間に
不満が蓄積されていた。その中で、ニヨロからケニア、
ムワンガ追討、そして再びケニアへと息づくひまもなく
転戦していた三箇中隊が遂に反乱を起した。彼らはウガ
ンダに引き返すとヴィクトリア湖のナイル河口近くのル
バ砦を落して立て籠り、三人の英軍將校を殺した。九月

のことである。

イギリス側は他の地方のスターダン兵の動揺を抑えながらガンダ軍の協力を得てルバ砦を包囲した。カクングルも直ぐに包囲に加わったが得意の野戦でなかったせいか、カグワが指揮していたせいか、目立った活躍はしていない。包囲が長びくうちに新たな危機が生じた。ムワングが再びブドゥンに戻って兵を興したのである。(Low, 1965: 72—75)

司令官マクドナルドは兵を割かねばならず、この機を利してスターダン兵は一八九八年一月囲みを破ってニョロ国目指して北西に進みはじめた。その進路はまさにカクングルの領地だった。彼は少数の兵を連れてブゲレレに戻った。スターダン兵は二十二日ナイル河畔に出現し二十九日にはカクングルの本拠バレに迫ってきた。カクングルは一たんガリラヤ砦に退いたが、圧倒的に劣勢の上弾薬も乏しくなってきたので三十一日ひそかに砦を脱出した。

この脱出も巧妙だった。まずできるだけ多くのカヌーを運び去って敵の足を封じ、次いで大胆にもスターダン兵の側面をすりぬけて追撃途上のマクドナルドの本隊に合

したのである。スターダン兵は一たんガリラヤ砦に入ったもののすぐに放棄してようやくセジブワ川を渡った。しかしすぐに追いつかれて多くの者が戦死し、残兵はナイル川北方へ辛うじて逃げ去った。カクングルはこの戦いで十人の部下を失い、マクドナルドの上奏によって「女王の反乱の星」という勲章を授けられている。(Thomas: 130—131)

十四 カバレガとムワンガ

この間ムワンガは放れ業ともいうべき行動をとった。ブドゥンを追われた彼が次に姿を現したのは何と永年の宿敵カバレガの陣営だった。このときカバレガもすでに王位を剝奪されていた。彼がムワンガをどんな顔で迎えたかは記録にないが、追いつめられた者の共感が和解に導いたことは想像に難くない。ここにスターダン兵の残党とランゴ族が加わりナマサレ半島に進出して侮り難い勢力となった。(Low, 1965: 76)

東海岸から到着したインド兵を主体にしたエヴァット中尉指揮のワケデイ野戦部隊は一八九九年三月ムルリに集結し、陸路チャワンティに進出した。ナマサレ半島の

対岸である。ここにカクングルと、キンブグウェの職を襲ったルワンダガの率いる四四〇人のガンダ兵が参加し、四月九日ナマサレ半島に上陸、カバレガ陣を急襲して遂にカバレガとムワンガの両王を捕えたのである。腕に銃弾を受けて沼に隠れていたカバレガをひきずり出したのはカクングルだったという説がある。

この作戦の成功もカクングルに負う所が大きいという報告がある。彼を尊敬するランゴ人がカバレガ勢の動静を逐一報らせたいたために奇襲が可能になったというのである。(Thomas: 131)

カバレガとムワンガはセイシェルス島に流され、ムワンガは数年後島で死んだ。九七年に始った大乱はこの勝利で落着し、イギリスは着々と植民地体制を築き上げていくのだが、この危機に果したガンダ人の貢献の大きさを楯にとってカグワはガンダ王国の自律性を強硬に主張し、植民地体制では類をみないほどの特権的地位をガンダ王国に与えられることに成功するのである。カクングルの戦場での働らきがまたまた宿命のライバルに利したことになる。しかしその返礼としてカクングルが後に得たのは、カクングルの勢力を抑制せよというカグワの植

民地政府に対する助言だった。

弁務官代行ターナン大尉は戦いの後カクングルにキョガ湖北方地域を平定する権限を与えている。この錦の御旗を得てカクングルのバケディ征服が始まる。最初に述べた如くこの後の活動の方がより興味深いのだが晩年について少々触れるにとどめる。

一九二〇年、カグワとカクングルの共通の友人である人類学者ジョン・ロスコイがムバレの近くに大きな集落を作って住んでいたカクングルを訪れている。ムバレこそ白人に取り上げられるまでカクングルが独力でユートピアを築いた町であった。その頃はマラキ教という新興宗教に自分なりの教義を加え、教祖的存在になっていたが、ロスコイのギス族調査に協力を惜しんでいない。(Rose, 1922. 242—4) しかし一九二三年には名目にもすぎなくなっていたムバレの首長職を辞し、絶えず聖書を引用する口やかましい老人として煙たがられるようになっていた。一九二六年アポロ・カグワが死に、翌年、許されて帰国途上のカバレガが故郷を目前にジンジャ近くで死んだ。奇しくもそこはカクングルのかつての居所だった。ニョロ人の多くがこの死を暗殺とみなしている

という。(Beattie:75) この二人のライバルに続くように一九二八年十一月二十四日、カクングルも死を迎えた。彼らが死に際に抱いていた共通の感情は、白人、というより時代、に対する深い怨みだったのではなからうか。

- (1) ヴィクトリア湖とアルバート湖・エトワート湖・キツ湖・タンガニカ湖には含まれた地域に存在した諸王国。北からニョロ、ガンダ、ンガ、トロ、マンコロ、ロキルワンダ、ルンジン、ン、ンヤ、ジンザなどその数は少なくな⁵。
- (2) 原語では国土を Buganda 国民を Baganda 言語を Luganda と⁶が国際慣用に從って語根のガンダをとった。ブガンダ王国といっても差支えな⁵。
- (3) 一九六九年ローマ法皇がウガンダを訪れたのはこの殉教者の存在によるところが大きかった。プロテスタントとしてのオボテ大統領の政治的勝利でもあった。
- (4) カグワについては Roscoe (1921) Apter (1961) など多くの著者が触れているが、カグワ自身ロスコエの影響でガンダ王国の伝統文化についていろいろ書き残しガンダ研究上で貴重な資料を提供してゐる。(Kagwa, A. 1905, 1906)
- (5) 原文はガンダ語でかかれたと⁶いうが、私の写したのはタイプ用紙二十三枚の英訳版である。(マケレレ大学所蔵)
- (6) この語は Fortes & Evans-pritchard 1940 に⁶ある。

参考文献

- Apter, D. E. 1961. *The Political Kingdom in Uganda*. PUP, Princeton.
- Beattie, J. 1971. *The Nyoro State*. Oxford, at the Clarendon Press.
- Fortes, M. & E. E. Evans-Pritchard (eds), 1940. *African Political Systems*. Oxford University Press, London.
- Harlow, V. & E. M. Chilver (eds), 1965. *History of East Africa* Volume Two, Oxford, at the Clarendon Press.
- Hemphill, M. de Kiewiet, 1963. 'The British Sphere 1884—94' in Oliver, R. & G. Mathew, 391—432.
- Johnston, H. 1902. *The Uganda Protectorate*, Hutchinson, London.
- Kagwa, Sir A. 1905. *Mpisa za Baganda* (1934, *The Customs of the Baganda*, Columbia University Press, New York).
- Lawrance, J. C. D. 1955. 'A History of Teso To 1937' *Uganda Journal*, 19, 7—40.
- 1957. *The Teso*, Oxford University Press, London.
- Low, D. A. 1963. 'The Northern Interior', in Oliver, R. & G. Mathew, 297—351.
- 1965. 'Uganda: The Establishment of the Protectorate 1894—1919' in Harlow V. & E. M. Chilver, 57—122.

長島信弘 1972 『子ノ民族誌』中公新書

Oliver, R & G. Mathew (eds). 1963, *History of East Africa* Volume one, Oxford, at the Clarendon Press.

Richards, A. I. 1959, *East African Chiefs*, Faber and Faber, London.

Roscoe, J. 1911, *The Baganda: Their Customs and Beliefs* F. Cass, London (Reprinted in 1965).

——1921, *Twenty-five Years in East Africa*, CUP, Cam-

bridge.

——1922, *The Soul of Central Africa*, Cassell, London

『ウガンダ周行記』(仮題). 長島信弘・松本陽子訳
綜合社(逆刊).

Thomas, H. B. 1939, 'Capax Imperii——The Story of
Semei Kakunguru' *Uganda Journal* 6, 125—136.

Waswa, S. 1950, *Kakunguru mu Bukedi* (MS).

(一橋大学助教授)